

品目別の需要動向

海外のコメの需要動向

- 海外の日本食レストランの店舗数は増加傾向にあり、アジアの店舗数が最も多い。日本食のマーケットは確実に世界で広がりつつある状況。
- 近年は日系中食・レストランチェーン、小売店の海外進出等を背景に、日本産米の海外需要も年々高まっている。

日本食レストランの広がり

2021年の海外における日本食レストランは2019年の約15.6万店から約15.9万店となった。



日系中食・外食チェーンの海外進出



元気寿司（香港、シンガポール）



スシロー（台湾、シンガポール等）



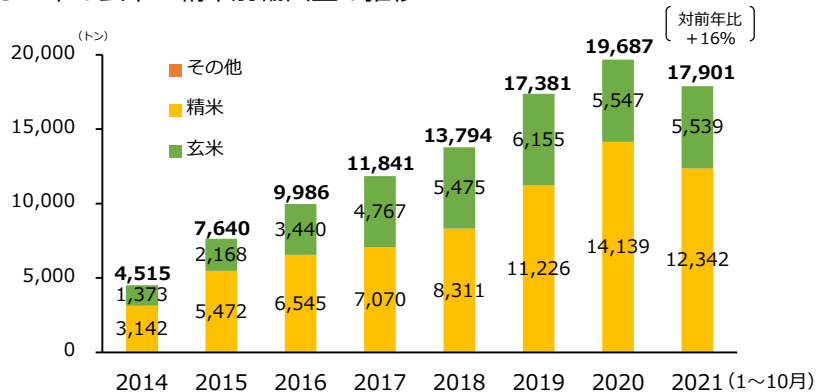
日系スーパーの中食での日本産米使用例（香港、シンガポール等）



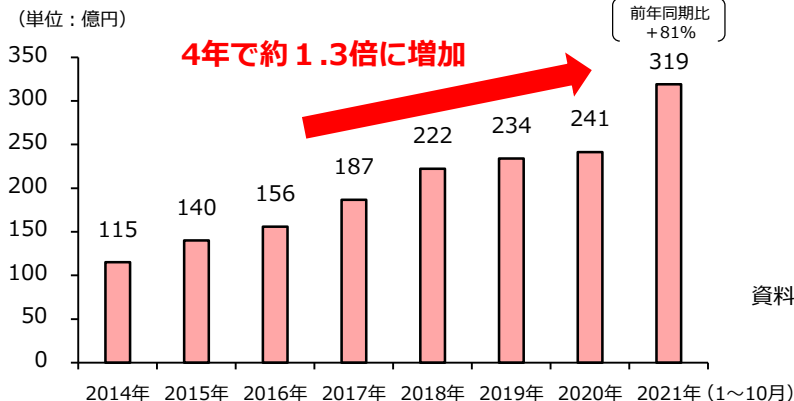
おむすび権米衛（株）イワイ（アメリカ、フランス）

コメ・コメ加工品の輸出実績

○ 米の玄米・精米別輸出量の推移



○ 日本酒の輸出実績

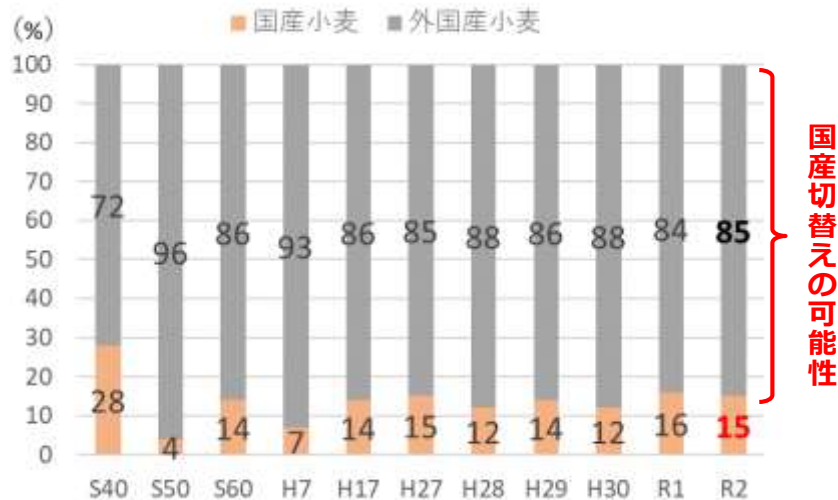


資料：財務省「貿易統計」

小麦の需要動向

- 令和2年度における小麦の食料自給率は15%。今後、国産麦に切り替える余地は大きい。
- 直近10年間で、パン用・中華麵用小麦粉の国内使用量が堅調に伸びている。
- 近年、品種改良が進み、実需者が求める品質に見合った小麦の生産が実現しつつあることから、パン・中華麵用小麦の作付け比率が増加しており、国産使用が進んでいる。
- こうした需要に応じた国産切替えの流れを一層推進していく必要がある。

○ 小麦の食料自給率（カロリーベース）



○ 麦製品の小麦粉使用量の推移



資料：食品産業動態調査のデータを用いて穀物課で作成

○ 国産小麦を使用した商品



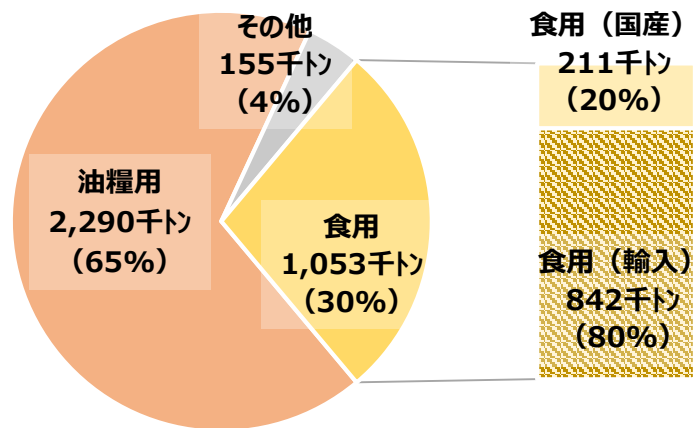
・ 国産小麦「ゆめちから」や「きたほなみ」を使用した菓子パンと食パン。

・ 某全国チェーンの飲食店において、原料となる小麦粉を100%国産に切り替えた餃子と麺類を提供。

大豆の需要動向

- 大豆の需要量は、中期的に増加傾向で推移し、令和2年度は約350万トン(食品用は約105万トン)。
- 今後の食用大豆需要見込みについて実需者にアンケートを実施した結果、全ての業界を通じて、今後の5年間の大豆使用量は増加見込み。
- 国産大豆も、価格、供給量、品質の安定が前提となるものの、消費者ニーズへの対応や高付加価値化に向け、需要が堅調となる見込み。
- 大豆ミートは、食料不足・環境問題の観点から世界的に関心を集め、近年、我が国でも多くの大手食品メーカーが参入を開始。一部企業は国産使用に前向き。

○ 我が国の大豆の需要量 (令和2年)



出典：食料需給表

注：四捨五入の関係で、100%に一致しない場合がある。

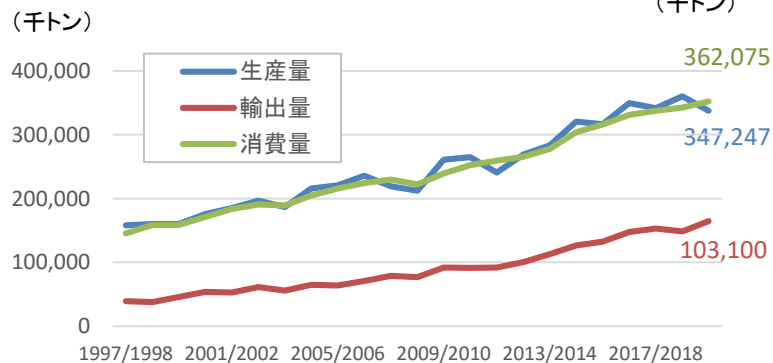
○ 食用大豆の需要見込みについて

	R2年度実績数量 (千トン)		R3年度 需要見込み		R4年度 需要見込み		R8年度 需要見込み	
	うち国産	うち国産	うち国産	うち国産	うち国産	うち国産	うち国産	
全 体	1,053	211	102%	103%	104%	106%	114%	126%
豆腐・豆乳			101%	103%	104%	104%	118%	129%
納 豆			103%	103%	103%	104%	103%	104%
煮 豆			102%	102%	101%	103%	102%	105%
味 噌			100%	102%	101%	102%	102%	104%
醬 油			100%	108%	109%	104%	112%	106%
そ の 他			100%	101%	105%	102%	109%	107%

※ R2年実績数量は「食料需給表」を基に、穀物課推計。

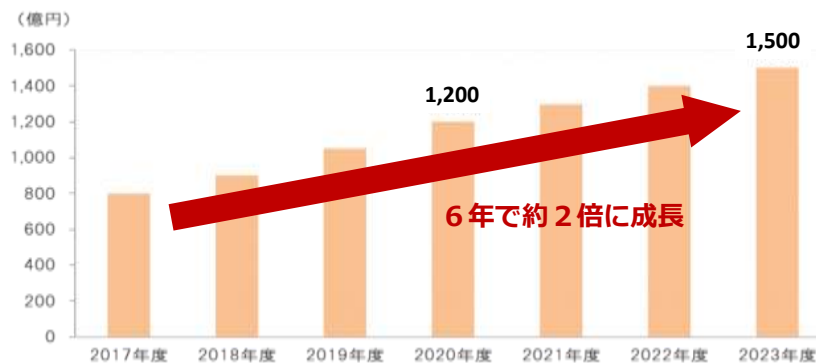
※ R3年以降の需要見込みは各業界団体からのアンケート結果(豆腐、豆乳、納豆、煮豆、味噌、醤油、きなこ：n=107)を基に、穀物課推計。なお、需要見込みについては、R2年の実需者実績を基準とした比率を示す。

○ 世界の大豆の需給



資料：米国農務省 (USDA) 「Production, Supply and Distribution」

○世界の人工肉(大豆ミート含む)市場規模予測

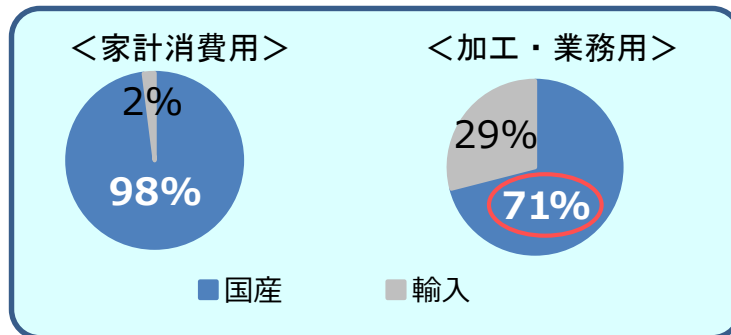
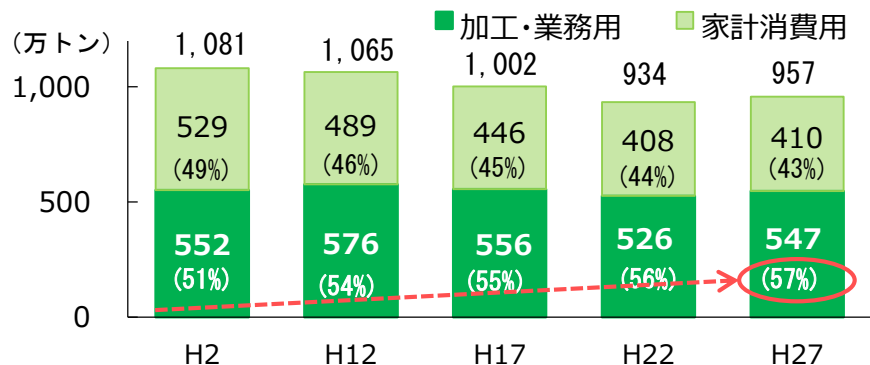


出典：MDB Digital Search (2019)

野菜の需要動向

- ・野菜需要全体に占める加工・業務用の割合は増加傾向で推移し、全体の6割。うち国産割合は7割で、家計消費用と比べて国産割合が低い。
- ・実需者に国産利用意向はあるものの、加工・業務用の契約取引は「**定時・定量・定品質・定価格(4定)**」が重要で、産地はこれに対応した**作柄安定技術の導入**などの対策が必要。

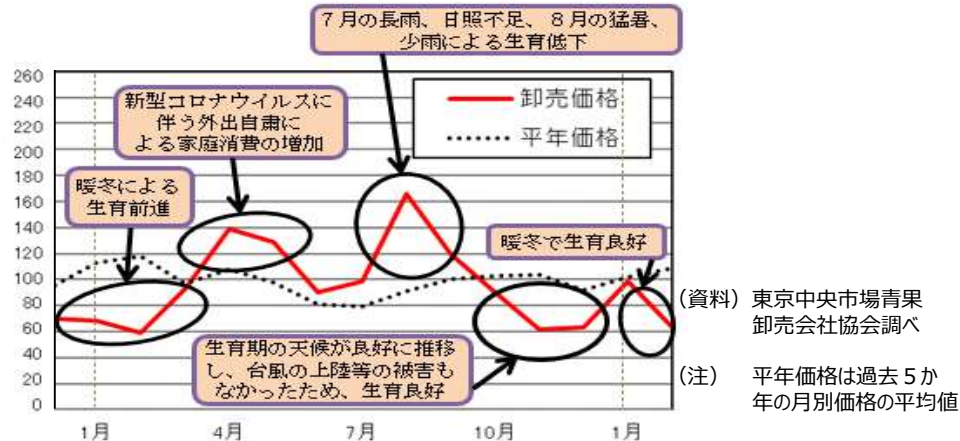
【家計消費用及び加工・業務用の国内仕向け状況と国産割合】



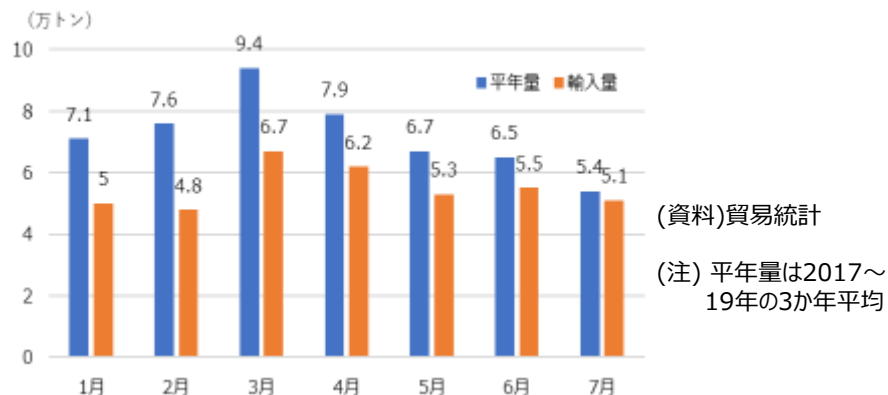
(出所) 農林水産政策研究所

- ・近年の異常気象の頻発により国産野菜の作柄は不安定化。
- ・**新型コロナ発生により生鮮野菜の輸入が減少**。にんにくなど輸入シェアが高い品目は一時的に品薄になるなどの影響がみられ、国産野菜の安定供給に向けては、**輸入から国産への切替推進が必要**。

【キャベツの卸売価格の推移（令和2年1月～令和3年2月）】



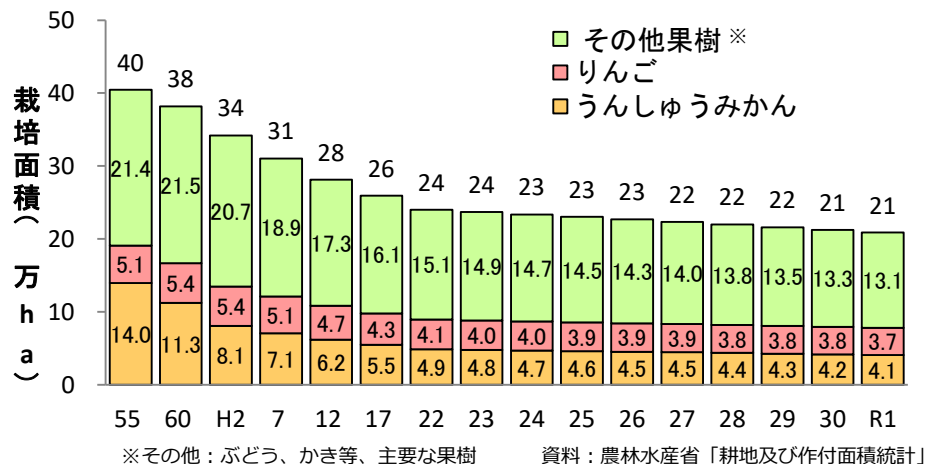
【2021年生鮮野菜輸入量の推移】



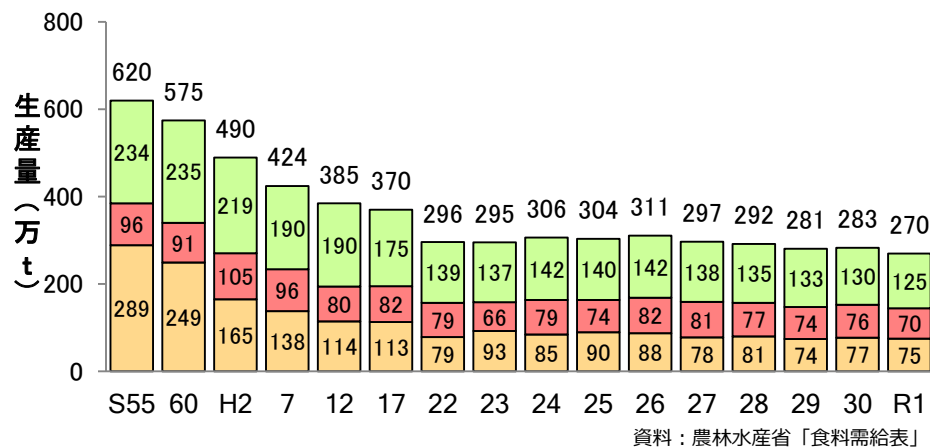
国産果実の需要動向

- 栽培面積や生産量は、近年、緩やかな減少傾向で推移。これは、高齢化が急速に進み、栽培農家数も減少傾向にあること等による。
- 果実の産出額は平成24年から6年連続して増加。卸売数量は減少傾向である中、卸売価格は上昇傾向で推移。
- この背景として、①優良品種・品目への転換等により、消費者ニーズにあった高品質な国産果実が生産されるようになったことに加え、②人口減少等による需要の減少以上に生産量が減少していることが考えられる。

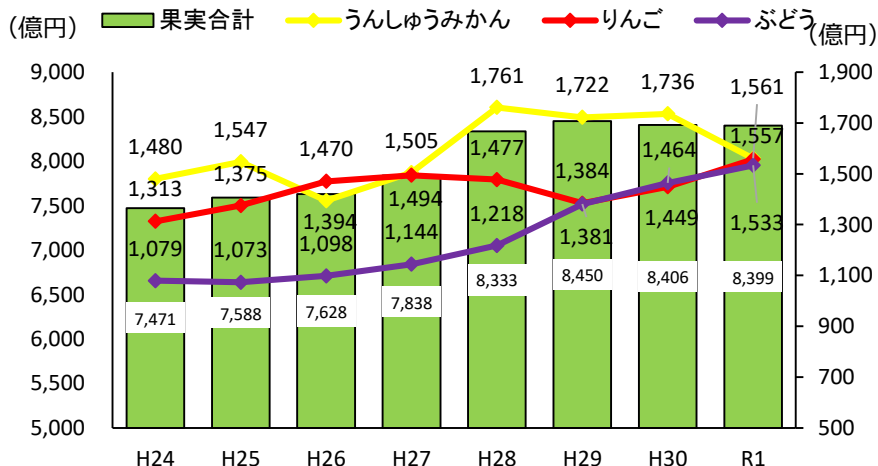
○果樹の栽培面積の推移



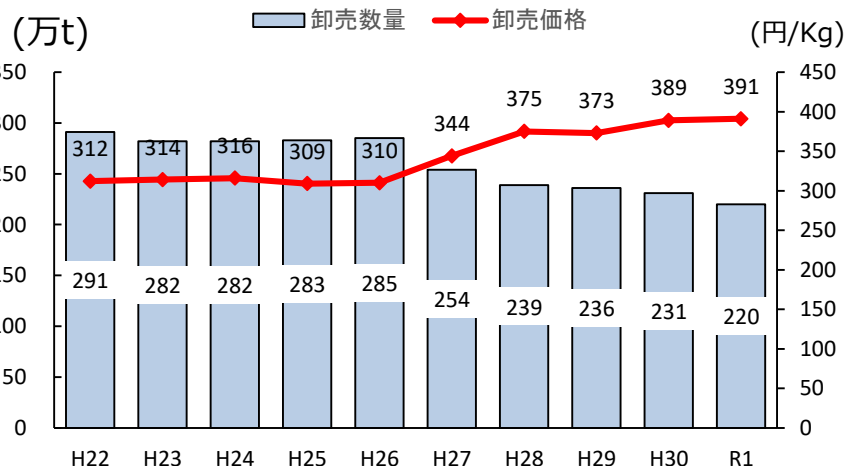
○果樹の生産量の推移



○国産果実の産出額の推移



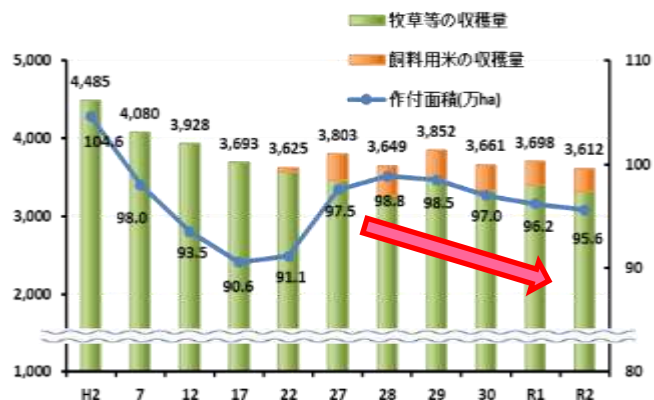
○国産果実の卸売数量・価格の推移



国産濃厚飼料及び国産粗飼料の需要動向

- 飼料作物の作付面積は漸減傾向で推移。
- 他方、近年、畜産生産基盤の強化により、家畜飼養頭数は増加傾向であり、それに伴い飼料需要も増加する見込み。
- さらに直近では、配合飼料価格の高騰、輸入乾牧草の価格高騰・需給のひっ迫（一部で品薄）といった状況により、**国産飼料に対する需要が増大**
- 令和2年度（概算）の飼料自給率（全体）は25%。このうち、粗飼料自給率は76%、濃厚飼料自給率は12%。しかしながら、**都府県においては自給飼料生産が減少しており、都府県酪農における粗飼料自給率は40%。**

○ 全国の飼料作物作付面積及び収穫量の推移



資料：農林水産省「作物統計」、
「耕地及び作付面積統計」、「新規需要米生産集出荷数量」(R2年度は
「新規需要米の都道府県別の取組計画認定状況」)
注：収穫量は飼料課で推計。

○ 乳用牛飼養戸数・頭数の推移

区分 / 年	平成25	26	27	28	29	30	31	31参考値 ※注3	令和2 ※注4	3
乳用牛飼養戸数(千戸)	19.4	18.6	17.7	17.0	16.4	15.7	15.0	14.9	14.4	13.9
(対前年増減率)(%)	(▲3.5)	(▲4.1)	(▲4.8)	(▲4.0)	(▲3.5)	(▲4.3)	(▲4.5)	—	(▲3.4)	(▲3.5)
うち成畜50頭以上層(千戸)	6.9	6.8	6.4	6.5	6.4	6.2	5.9	5.9	5.8	5.8
戸数シェア(%)	(35.9)	(37.3)	(36.9)	(38.9)	(39.6)	(40.3)	(39.7)	(39.8)	(40.2)	(41.7)
乳用牛飼養頭数(千頭)	1,423	1,395	1,371	1,345	1,323	1,328	1,332	1,339	1,352	1,356
(対前年増減率)(%)	(▲1.8)	(▲2.0)	(▲1.7)	(▲1.9)	(▲1.6)	(0.4)	(0.3)	—	(1.0)	(0.3)
うち経産牛頭数(千頭)	923	893	870	871	852	847	839	841	839	849
うち未経産牛(乳用後継牛)頭数(千頭)	500	501	502	474	471	481	492	499	513	507
うち成畜50頭以上層(千頭)	944	948	940	949	934	961	962	981	999	1,026
頭数シェア(%)	(67.8)	(69.7)	(70.4)	(72.5)	(72.6)	(74.3)	(74.4)	(74.4)	(73.9)	(75.7)
一戸当たり										
経産牛頭数(頭)	全国 47.6	48.0	49.1	51.2	52.0	54.0	55.9	56.4	58.3	61.1
	北海道 68.1	68.2	68.8	72.6	72.8	75.2	77.8	76.0	78.7	82.2
	都府県 35.9	36.2	37.2	38.1	38.9	40.4	41.3	43.3	44.5	46.5
経産牛一頭当たり										
乳量(kg)	全国 8,198	8,316	8,511	8,522	8,581	8,636	<8,767>※注4	8,806	8,806	8,943
	北海道 8,056	8,218	8,407	8,394	8,517	8,568	<8,945>			

資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」
注1：各年とも2月1日現在の数値。ただし、経産牛一頭当たり乳量は年度の数値。
注2：平成31年以前の成畜50頭以上層戸数シェア及び頭数シェアは、学校、試験場等の非営利的な飼養者を除いた数値を用いて算出している。
注3：令和2年から統計手法が変更されたため、令和2年の統計手法を用いて集計した平成31年の数値を参考値として記載。
注4：令和2年の対前年増減率は、平成31年の参考値との比較である。
注5：経産牛一頭当たり乳量は「当年度生乳生産量÷当年と翌年の経産牛頭数の平均」から算出しており、平成31年<>は、平成31年の参考値と令和2年の経産牛頭数の平均を用いている。

○ 近年の飼料自給率の推移

年度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2(概算)
全体	26%	26%	26%	27%	28%	27%	26%	25%	25%	25%
粗飼料	77%	76%	77%	78%	79%	78%	78%	76%	77%	76%
濃厚飼料	12%	12%	12%	14%	14%	14%	13%	12%	12%	12%

(参考) とうもろこしのシカゴ相場推移

